



若者は心を見る。  
老人は世内紀を見る。

若いころからポップ・アートが好きだった。はじめて出会ったのは一九六〇年代の後半で、当時ウィーンで暮っていた。その二〇世紀美術館でアンディ・ウオーホルを見た。どういう技法によったのか、写真をスクリーンに引きうつしたぐあい、モノローやケネディといった有名人の巨大なポर्टレートが壁一面に並んでいた。たしかにおなじみのポर्टレートだが、肉体のみならず存在それ自体も抜きとられたぐあいなのだ。ただ意匠化された顔だけが壁面にはりついている。

ロイ・リキテンスタインもそこで知った。漫画や映画のスクリーンをとりこんで、極端なまでにデザイン化され、赤やブルーの色と線がジャズを演奏しているぐあいだった。ジャン・ティンゲリといったと思うが、壊れたモーターやベルトや鉄くずを組み合わせた「彫刻」があった。同じ作者のべつの一つは、同じく廃品の組み合わせながら、全体がモーター仕掛けで生きもののようにゆっくり動いていた。

「古都ウィーン」というように古いものなら何でもあつた。街全体が骨董品のように、旧市街はモーツァルトのポップに美術館を開放したのだろう。超保守的な街で前衛を守っていくのは容易ではない。そのうち文部官僚と喧嘩でもしたのか、急に辞表を出してハンブルクへ行ってしまった。

が住んでいたところと寸分かわらない。そんな街だからこそ二〇世紀美術館が特別の意味をもっていたのだろう。何がなくともそこには「現代」があった。現代の風が吹き、現代の空気が流れている。ポップ・アートがまさにそうであつて、どうしてこんなものがおもしろいのか、自分にもよくわからないが、中世やルネサンスの名画づくめの美術館にはまるきりないものが、こちらにはふんだんにあつた。その前に立つと、なんともいえない解放感を覚え、心身ともに軽くなったぐあいなのだ。スクリーンや漫画仕立てや廃品の組み合わせは、それ自体はバカバカしいつくりものながら、ながめていて一向に見飽きがない。ユーモラスで、いたずらが仕掛けてあつて、これこそ「現代の芸術」と思わずにはいられない。

ポピュラー・アート(大衆芸術)に由来するポップが市民権を得たのは一九六〇年代になってからといわれるから、自分ではそれと知らず、わりと早い時期になじんだことになる。ウィーンの二〇世紀美術館はヴェルナー・ホフマンという四十代のキレ者の美術批評家が館長をしており、それまでせいぜい、ニューヨーク生まれのサブカルチャー的風俗ぐらいに思われてい

日本に帰ってきたら、美術展はどこもかしこも抽象画ばかりだった。いま思い出してもフシギでならないのだが、戦後のあるころまで、抽象画でなくては絵にあらざつたといった風潮だった。花や人物や風景を描こうものなら、ただそれだけで過去の遺物のようにみなされた。あのおびただしく生産された抽象画は、いったい何を抽象していたのだろう。せいぜいのところ感覚の陶酔を色に移した程度だったのではあるまいか。それもほんのひと握りの優れた抽象画家のケースであつて、おおかたはものものしく絵の具をカンバスに塗つけただけだった。

そんななかで東京・品川の新美術館はポップにも窓を開いていた。ウォーホル、リキテンスタイン、デュビュッフェ、キーフアー……。草間彌生や森村泰昌などもそこで知った。アンフォルメルや、アクシオン・ペインティングや、キネティック・アートなどと名称はちがっても、形態の純粹化という点ではかわらない。